

常滑焼

常滑の歴史と経済発展は、焼き物と密接に結びついている。越前、瀬戸、信楽、丹波、備前とともに「日本六古窯」のひとつとして知られる。これらの地域は 1000 年以上前から続く陶器作りの伝統がある。

新たなテクニック

常滑焼の起源は製作技術が知多半島（愛知県）にもたらされた 12 世紀初頭にさかのぼる。地域は、穴窯（トンネル状の傾斜のある窯）を掘りやすい柔らかい土壌となだらかな丘陵があり、良質な粘土が豊富に供給され、海にも近く、完成品の輸送が容易であったため、陶器生産に適していた。14 世紀には、常滑市の陶工たちは、紐状にした粘土を底から積み上げていく「ひもづくり」という技法で、大型の貯蔵瓶や調理器具を生産していた。

15 世紀後半には大窯が出現したことで常滑市の生産能力は向上し、高品質な焼き物の産地として常滑市の知名度は上がった。常滑の壺は酒の運搬から埋葬後の遺灰入れまで、さまざまな実用的な用途に使われ、花器や小壺は、京都の洗練された茶の湯文化に用いられた。

19 世紀半ばに中国から伝道された技術によって、常滑を代表する赤土の急須が誕生した。この粘土は鉄分を多く含み、独特の赤い色合いをしており、保温力の高さと多孔質で知られている。この急須は現在でも珍重されている。急会う本体と蓋がぴったりと合うように細心の注意が払われ、気密性の高い仕上がりになっている。急須の内部は釉掛けされていないので、鉄分を多く含む常滑市の土が緑茶の渋みを和らげ、まろやかな味わいのお茶になると言われている。急須は西洋のティーポットよりも小さく、注ぎ口に対して 90 度の角度で取手が付いているのが特徴だ。

適応と近代化

1830 年頃、常滑市で最も古い登窯が作られ、エネルギー効率に優れた陶器の大量生産が可能になった。1850 年代には、常滑焼は陶器製便器の製造も開始し、19 世紀後半に日本が急速に近代化すると、屋根瓦や上下水道用パイプの製造も開始した。

1930 年代後半には、職人たちが陶器の置物を作り始め、1950 年には招き猫の生産で日本一になった。陶磁器生産のピークは 1950 年代で、数百もの窯があった。その後、製造技術の向上や環境規制の強化により、大規模な生産は減少していった。

ここ数十年、ライフスタイルの変化や海外からの関心によって、常滑焼はさらに多様化している。職人たちは嗜好の変化に対応し、陶芸が繁栄し続けるよう伝統的な技法と現代的な革

新の両方を取り入れてきた。今日、常滑の焼き物の招き猫や赤土急須、盆栽鉢は国内外で人気を博している。常滑焼についてより詳しく知りたければ「やきもの散歩道」Bコースにある「とこなめ陶の森」を訪れよう。